

「交流」に期待する三つの効果

中野 敦

(韓国カトリック大学校・言語文化学部)

1. はじめに

2000年から毎年、韓国カトリック大学校において信州大学の学生と韓国カトリック大学校言語文化学部日本語専攻学生との間に「交流」の場が設けられている。2000年は3月に、2001年・2002年は国際親善交流及び学術祭が行われる10月に、毎回1週間の日程で実施された。特に2002年はスピーチ大会をはじめ、韓国語講座、授業見学、ホームステイ、日本語教育実習、講演、演劇発表等々、これまで以上に盛りだくさんの内容の1週間だった。三回の体験から交流に期待できる学習上の効果について考えてみる。

2. 学習動機

「この人たちはなぜ日本語を勉強しているのだろう」。これは私が韓国で日本語を教え始めて以来の関心事である。

韓国で最初に日本語を教えたのはある大学附属の語学学校だった。学生は大学生にかぎらず、卒業を控えた高校生や主婦、中学校の先生、公務員などなど。当然それぞれのニーズも多様で、クラス運営はなかなか大変だった。ある学生は資格試験のために、ある学生は仕事のために、そしてある学生は趣味で、またある学生は日本留学から帰国した後のメンテナンスのために日本語を勉強していた。そんな中に英語が嫌いだから日本語を勉強するという学生もいた。最低でも1つくらいは外国語ができなければいけないとを感じるものが、苦手な英語の代わりに日本語を選択するらしい。このように韓国では日本語が様々な動機で学習されている。

これまでに報告されている日本語学習動機の調査を概観すると、大きく4つの学習動機が確認されていることがわかる。1つは統合的(親和的)動機である。これはその言語を話す集団の一員になりたいというような志向によるもの。2つ目は道具的動機である。これは外国語をある目的達成のための道具として使いたいという志向によるもの。3つ目は語学学習動機である。これは学習目的が語学学習そのものにあるもの。4つ目は誘発的動機である。これは外部からの刺激に誘発されて学習に向かうようなもの。調査によってはこれ以外にも様々な動機が提唱されているが、上の具体的な動

機もだいたいこの4つに集約できるのではないかと思う。

ところで毎年、「交流」をきっかけに数人の学生の学習態度が積極的になり、日本語能力が飛躍的に伸びるのを目の当たりにする。その変化があまりにも大きいので、効果的な授業をと必死に準備に取り組んできたこれまでの自分の努力はいったい何だったのだろうかと悩んでしまうほどである。このことをきっかけに「交流」による動機付けの重要性を強く感じるようになった。櫻坂・奥山(2001)に「韓国の大学生が日本語や語学知識の習得のみならず、異文化としての日本の理解、日本人との交流のような日本(人)との接触を希求する強い動機づけが日本語学習にあらわれた」という報告がある。私が行った調査ではこの日本人との接触を希求するような動機が、高い自己評価と相関にあった。日本語母語話者との「交流」が動機を高め、学習成果に影響を与えることがあることは経験的にもまた調査からも明らかである。

3. 日本語母語話者とのネットワーク

学生に教室外での学習活動についてたずねてみると、いわゆる「優等生」は教室外活動の重要性をはっきりと認知していて、その活動が他の学生よりも積極的であることがわかる。例えば、日本のマンガやアニメーション、歌謡曲が好きでそれを通して語彙を増やしていたりする。このような活動が次第に教室内活動での意欲へと結びつくという。

更に、教室の外に日本語母語話者とのネットワークをもっていることが重要だという話もよく聞く。それは、韓国にいる日本人留学生やインターネットで知り合った日本語母語話者とのネットワークであったり、自らが日本留学中に知り合った日本語母語話者とのネットワークであったりする。村野(1996)の調査においてもネットワーク作りが他の学習ストラテジーと共に有効であるという学生の評価が報告されている。

ところがネットワークは、機会さえ与えられれば簡単に作れるというものでもない。それはネットワークが良好な相互関係によってはじめて成立するものだからである。この関係作りの難しさは、互いの年齢や性別、性格などによっても違うだろうし、相手がどれだけ韓国に滞在できるかまた自分がどれだけ日本に滞在できるかなど「交流」の期間によっても違うだろう。

韓国のある大学で行われた交流に関する調査の中で、韓国人学生の中には会って気が合えばすぐに親しくなれるというものが多かったのに対し、日本人学生は親しくなるのに時間がかかると答えるものが多かったという報告もある。

実際のところ一度に多くの学生がしかも長く一緒に過ごせるような「交流」の場を設けるのは難しい。十分な人数と十分な期間を確保しやすい大学間で行われる「交流」

はネットワーク形成の絶好の機会であり、その機会は効果的に活用されるべきであろう。

4. 異文化理解

学習動機の強化と、日本国外ではなかなか持つことが難しい日本語母語話者とのネットワーク形成についてはすでに上で述べた。そしてもうひとつ、交流から得られる効果として日本文化(異文化)を理解し、その理解を行動のために使える能力の育成ということを考える。

言語教育においては、これまでいわゆる言語能力の向上がその主な目的とされてきたが、実際の場面ではいわゆる言語能力の低さからくる意思疎通の難しさよりも、異文化の理解不足による誤解の方が、深刻な問題につながる場合が多い。例えば、文化による文脈依存度の違い(*1)から、相手を「言ったことしか分からなく、気が利かない」だとか、時間感覚の違い(*2)から、「時間にルーズでだらしない」などと、誤って判断してしまうことがある。このような誤解は、ネットワークの形成にはもちろん、学習動機にさえ悪影響を及ぼすことになりかねない。

文化理解はコミュニケーションと密接な関係にあり、円滑なコミュニケーション能力の育成を目標にした近年の言語教育においては欠かすことのできないものである。交流の場を活用してプロジェクトワークなどを実施すると言語と文化の両面を効果的に学ぶことができ、大きな成果が得られる。「交流」は異文化教育の観点でも重要な学習機会と思われる。

5. 終わりに

本稿では筆者が韓国で日本語を教えながら日頃感じ、考えてきたことを「交流」の経験をもとにまとめてみた。

これからの教育は、いかに教室外で自律的に学習できるか、またそれをどう支援していくかということも大きな課題ではないだろうか。また、グローバル化した世の中において、異文化を捉え、異文化に対応できる力は不可欠であり、そんな能力の育成が言語教育においてますます重要になってくるとと思われる。信州大学、カトリック大 学校双方に有意義な「交流」がこれからも続いていく事を祈っている。

【注】

(*1) アメリカの文化人類学者である E. T. ホールによると「コミュニケーションスタイルには高コンテキストスタイルと低コンテキストスタイルがある。」という。コンテキストとは、文脈と訳されることが多く、具体的には、状況や背景情報などを指す。高コンテキストスタイルはコンテキストに依存する度合いが高いコミュニケーションスタイルで、「何を言ったかよりも、どのように、どのような状況で言ったか」が重視される。高コンテキストスタイルを使用する文化では、仲間内で共有される情報が多いため、ひとつひとつ言葉に出して説明しなくても理解しあうことができるという前提に立っている。低コンテキストスタイルはコンテキストに依存する度合いが低いコミュニケーションスタイルで、「どんな状況で、どのように言ったかよりも、何を言ったか」が重視される。数字や日時など、正確に説明することが要求される。だから高コンテキストスタイルの話者が低コンテキストスタイルの話者と話をすると「言ったことしか分からない気が利かない奴」などと誤解することがある。

(*2) アメリカの文化人類学者の E. T. ホールによると世界には異なる時間感覚が少なくとも二つあるという。一度に一つの仕事に集中する M タイム型（単一的時間感覚— Monochronic Time—）と、人と交わりながら複数の仕事をする P タイム型（多元的時間感覚— Polychronic Time—）である。ポリクロニックな時間は、現在のスケジュールを守るというよりも、人間のかかわり合いと、相互交流に力点を置く。ひとと会う約束はそれほど重大なものとは考えられず、その結果しばしば破られる。日本人は本来 P タイム型であるのに、近代化とともに、社会生活のルールが M タイム的になっているといわれる。コリアンタイムと呼ばれる韓国の時間感覚は P タイム型に近いと思われる。しかし近年韓国でも M タイム型への移行が観察される。

だから、M タイム型の人が P タイム型の人に出会うと、「時間も守れないだらしないやつ」などという誤解をしてしまうことがある。

【参考文献】

- 櫻坂英子・奥山洋子(2001)「韓国人の対日観と日本語学習動機の検討 - 大学生群と成人群の世代間比較 -」『日本語学報 別冊』第 47 輯 韓国日本学界 pp. 77-92
- 細川英雄 編著(2002)『ことばと文化を結ぶ日本語教育をめざして』凡人社
- 村野良子(1996) 「高校留学生の自律的学習と学習ストラテジー—日本語学習の支援のために—」『日本語教育』91 号 pp. 120 - 131 日本語教育学会
- 八代京子他(1998) 『異文化トレーニング』三修社